

連結動詞 *быть* の主格述語名詞句についての覚え書き¹

匹 田 剛

0. はじめに

ロシア語の連結動詞 (связочный глагол, copular verb) *быть* (to be) は、その述語名詞句として、2つのタイプの名詞句をとることができる。一つ目は述語名詞句に一般的に見られる造格 (творительный падеж, instrumental case) の名詞句であり⁽¹⁾、もう一つは主格 (именительный падеж, nominative case) の名詞句である⁽²⁾。

- (1) Таня была студенткой.
Tanja-NOM. be-F.PA. student-F.INS.

「ターニャは学生だった。」

- (2) Я φ студент.
I-NOM. be-PR. student-M.NOM.

「私は学生だ。」²

これら2つの名詞句の意味的な違いに関しては、例えば、Кохтев и Розенталь (1984) は原則として造格が「一時的な (временный)」性質を表し、それに対して主格は「恒常的な (постоянный)」性質を表すとされている。ただし、Chvany (1975) や Barnetová (1979) によればこのような差異は現代ロシア語ではかなり無意味なものであり、ほとんど文体論的な差異に過ぎないと主張している。そこでの議論によれば造格述語名詞句は文体論的に「標準的」であるというニュアンスがあるということである。

ここで問題となるのは主格形としてあらわれる名詞句の方である。以下に論じられるように、主格の述語名詞句は造格のそれとはいくつかの点で異なる性質を示す。また、そもそもロシア語において主格というのは主語に与えられるべき構造格 (structural case) であり、このような名詞句に与えられるべきものではない。それではこの名詞句はいったい何なのか。本稿ではこのような「異常な」主格名詞句に関してその性質を解明するための手始めとして、いくつかの問題を概観していきたい。

1. 動詞による支配

この主格述語名詞句に関する分析には現在2種類のものが見られる。すなわち、1つは伝統的な分析とされるものであり、主格述語は主格主語と格に関して一致していると論じているものである (例えば, АН СССР (1970,1980) や Barnetová (1979) を参照)。

これに対して、Иомдин (1990) や Rappaport (1986) などは、ロシア語の連結動詞 *быть* は述語名詞句に造格のみならず主格をも付与する能力があると考えている。それは例えば他動詞が対格を目的語に与えているのと同じであるという議論である。Иомдин (1990) が伝統的な一致説に対する対案としてのこの考え方に対する根拠を詳細に述べているので、以下それを概観し、考察を加えたい。

Иомдин (1990) がロシア語の連結動詞 *быть* が主格述語に対しても造格述語と同様に格を付与し

ていると考える根拠とするのは以下の通りである。

i) ロシア語において主格述語は *быть* にのみ見られるわけではない。例えば, *называться*「呼ばれる」や *зваться*「呼ばれる」のような「呼称の動詞 (глаголы называния)」は同様に造格の他に主格の述語をとることも可能である。このことは *быть* の主格述語が特別な現象ではないことを示すものであり, それが動詞によって格を与えられているものであることをあらわしていると考えられる。

- (3) Ее сестра звалась Татьяна.
her sister-NOM. be called-F.PA. Tat'jana-NOM.

「彼女の姉はタチヤナと呼ばれていた。」

- (4) Это все называется город Киев.
this all be called-PR.3. SG. city-NOM. Kiev-NOM.

「これらは全てキエフ市と呼ばれている。」

この考え方に対しては2つの議論が生じ得る。第1に, ここで Иомдин (1990) が例としてあげているのはこれら呼称の動詞のみである。これらの動詞の場合, ここで見られる主格名詞句がいわゆる「引用形 (citation form)」である可能性が否定できず, 積極的に動詞によって主格が支配されていると断定する根拠にはならない。

第2に, たとえこれらが *быть* と同じ現象であると考えたとしても, いずれにせよただ単に *быть* と同じ現象を他の動詞も示しているというだけで, 積極的に *быть* が主格を与えるという議論をサポートするものにはならないと考えられる。

ii) ロシア語の連結動詞 *быть* の述語名詞には主格形をとる場合と造格形をとる場合とがある。

- (5) Мой брат был моряк.
my-NOM. brother-NOM. be-M.PA. seaman-NOM.

「私の兄は船員だった。」

- (6) Мой брат был моряком.
my-NOM. brother-NOM. be-M.PA. seaman-INS.

このような非常に似通った現象を片や動詞による支配と考え, 片やそうでないと考えるのはよろしくない。

しかしながら, このような考え方は「そうであつたらより美しい」という希望を述べたことにはなっても主格名詞句が動詞によって格を与えられていると考える根拠には決してなり得ない。言語にはしばしば一見類似の現象であるように見えて実は全く異なったものであると考えなければいけないものは多数存在するからである。

iii) 形容詞の短語尾形による述語には動詞によってとれるものととれないものがあるが, これは動詞のそれが支配する句に対する選択制限によるものであると考えるのが自然である。よって, 類似の現象と思われる主格述語名詞句に関しても動詞によって支配されていると考える方がより自然であり一貫していると思われる。

この考え方も同様に無理があると思われる。上述 (ii) と同じように一見類似しているからといってそれが本当にパラレルに扱って良いとアプリアリにみなすわけにはいかないし, またこの場合, 形容詞の短語尾と名詞の主格形を結び付ける理由も見当たらない。

iv) 一致だとしたら具体的にどのような規則を立てるのかはなはだ問題である。この点については第3節で一致説に関して論じる際に詳しく触れるが, いずれにせよこれは一致説の問題点で

はあっても決して彼の説の論拠にはなり得ない。

以上のように、Июмдин (1990) の提示する論拠は、連結動詞 *быть* が主格述語に格を与えていると考えるための積極的な強い根拠とはなり得ないことを見た。それではこの考え方を否定する根拠はあるのであろうか。次の第2節ではИюмдин (1990) の説に対する反証となる現象を見る。

2. 主格述語名詞句の「主語性」

そもそもこのタイプの名詞句は形態的に主格を表示されているという点で「主語的」であり、造格という「主語的」でない格形を示すものとは異なっている。このような主格述語が「主語的」な性質を示すのはただ単に主格形を持っているということだけなのであろうか。以下、本節ではこのタイプの名詞句が単に主格であること以外にも形式的な点で「主語性」を示していることを論じ、Июмдин (1990) の考え方では説明が不可能であることを示す。

2.1. 主格主語のない従属節

ロシア語においても、英語やその他の言語と同様に主格主語があらわれることが義務的に不可能である従属節がある。このような例にはロシア語においては以下にあげるようなタイプの節がある：i) 副動詞 (adverbial participle; деепричастие) 節, ii) 形動詞 (adjectival participle; причастие) 節, iii) 不定動詞 (infinitive; инфинитив) 節, iv) いわゆる小節 (small clause)。以下、それらの例を見てみよう。(例文(1)–(3)はИюмдин (1990: 66) からの引用。)

(7) 副動詞節

- a) * [Будучи настоящим врачом], Петров не мог поступить иначе.
 be-ADVPART. genuine-NOM. doctor-NOM. Petrov-NOM. not could
 to act else

- b) [Будучи настоящим врачом], Петров не мог поступить иначе.
 genuine-INS. doctor-INS.

「ペトロフは真の医師であるので他にやりようがなかった。」

(8) 形動詞節

- a) * Петров, [бывший в ту пору врачом], принял решение оперировать раннего.
 Petrov-NOM. be-ADVPART.NOM. at that time doctor-NOM. accepted
 decision-ACC. to operate injured-NOM.

- b) Петров, [бывший в ту пору врачом], принял решение оперировать раннего.
 doctor-INS.

「当時医者だったペトロフは負傷者に手術を行うことを決定した。」

(9) 不定動詞節

- a) * [Чтобы быть настоящим врачом], нужно любить людей.
 in order to be genuine-NOM. doctor-NOM. necessary to love
 people-ACC.

- b) [Чтобы быть настоящим врачом], нужно любить людей.
genuine-INS. doctor-INS.

「真の医師であるためには人間を愛する必要がある。」

(10) 小節

- a) *Я считаю [Никиту дурак].
I-NOM. consider Nikita-ACC. fool-NOM.

- b) Я считаю [Никиту дураком].
fool-INS.

「私はニキータを馬鹿だと考える。」

これらのタイプの節はいずれも上述のように主格主語があらわれることが不可能なものばかりであるが、いずれの場合でも上で明らかなように造格述語は有することができるものの、主格述語を有することはできない。Иомдин (1990) が述べるように、このことは造格述語と主格述語の違いを考察するとき最強でなおかつ最大の議論となると考えられる。すなわち、主格述語が存在し得ないということと主格主語が存在し得ないということは同一の現象の2つの面であると考えられるからである。従って、Иомдин (1990) のような、*быть* が主格を造格と同じように与えるという考え方では説明がつかないことになる³。

ちなみに、命令法の場合、主格主語は通常は削除されるのが一般的であるが、その削除は決して義務的なものではない。このような場合、主格述語を有する文に対しては「可能かも知れないが良いとは言えない」という marginal な判断を頂戴した。

- (11) Будь красавицей.
be-IMP.SG. beauty-SG.INS.

「美人であれ。」

- (12) Будь красавица.
be-IMP.SG. beauty-SG.NOM.

「美人であれ。」

これは、話者にとって主格主語の存在が不確かなものであることによるのではないかと思われる。

2.2. 形動詞節が修飾する主要部名詞

ロシア語の主格述語が「主語的」な性質を示すと考えられる点は統語的な問題の中にもう一つある。前節 2.1. で述べたように、連結動詞 *быть* の形動詞形である *бывший* は主格述語をとることができない。

(13)

- a) * [бывший врач] человек
be-ADJPART.M. doctor-NOM. man-M.

- b) [бывший врачом] человек
doctor-INS.

「医者であった人」

さて、ここで注意を向けなければいけないのは形動詞の主要部名詞(head noun)である。通常、ロシア語においては形動詞の主要部名詞は論理上の主語となるものをとる。

- (14) Она любит студента, [читающего много книг].
she-NOM. loves student-ACC. read-ADJPART.ACC. many books

「彼女は本をたくさん読む学生が好きだ。」

そして、上掲の *бывший* を用いた例文も主要部名詞となっているのは論理上の主語であると考えられる。しかしながら、ロシア語の *бывший* は場合によっては論理上の述語をその主要部名詞としてとることができる。

- (15) бывший врач
be-ADJPART.M. doctor.M.

「かつて医師だった人」

このことから、ロシア語の連結動詞 *быть* の主格述語が主語と同列に扱われているという「主語性」が見て取れる。そして、Июдин (1990) の考え方に従えば、このような「主語性」は説明がつかないのである。

2.3. 主語と動詞の一致

ここでは、形態論的な観点、すなわち、動詞の主語との一致の観点から主格述語名詞句の「主語性」について考察する。

ロシア語の動詞は通常、以下のような例文から明らかなように主格主語との一致を示す。

- (16) Он читает.
he-NOM. read-PR.3. SG.

「彼は読書している。」

- (17) Мы гуляли в парке.
we-NOM. walk-PA.PL. in park-LOC.

「我々は公園を散歩した。」

それではここで問題となっている連結動詞 *быть* はどうであろうか。ロシア語の連結動詞 *быть* は、他の動詞と同じように、その述語名詞句が主格であろうと、造格であろうと、原則として主格主語との一致を示す。

- (18) Столица России была Санкт-Петербургом.
capital-F.NOM. Russia-GEN. be-PA.F. St. Petersburg-M.NOM.

「ロシアの首都はサンクト・ペテルブルグであった。」

- (19) Это здание было школой.
this-N.NOM. building-N.NOM. be-PA.N. school-F.INS.

「この建物は学校だった。」

このように、動詞の形態法の観点から考えると「主語性」を示すのはあくまで主格主語の方であるかのように見える。しかしながら、このような [主格主語名詞句+連結動詞+主格述語名詞句] という文型において、後ろの述語名詞句が動詞との一致に関して「主語性」を示すことがある。

例えば、主格主語が代名詞の *это* であり、「これは～である。」というような意味になるタイプの文では、この場合、連結動詞 *быть* は義務的に主格主語ではなく主格述語名詞句に一致を示さなければならない。

- (20) Это была школа.
this-N.NOM. be-PA.F. school-F.NOM.

「これは学校だった。」

もちろん、このような述語との一致はあくまで主格述語を持つ文にのみ許されるのであって、造格述語を持つ文では許されない。

- (21) *Это была школой.
school-F.INS.

このように、主格述語は連結動詞の主語が代名詞の *это* である場合、「主語的な」性質を示す。

また、このような主格主語が代名詞という特別なものではなく通常の名詞句であっても形態論的に主格述語名詞句が主語的な性質を見せることもある。АН СССР (1970) や Barnetová (1979) はこのような主格述語を持つ連結動詞の文に関する論述の中で、連結動詞の一致する対象に関してゆれ (колебание) があることを指摘している⁴。以下の例文は АН СССР (1970: 555) からのものである。

- (22) Его спокойствие было/была личина.
his calmness-N.NOM. be-PA.N./F. pretense-F.NOM.

「彼の平静さは見せかけだった。」

- (23) Кабинет был/была большая комната.
office-M.NOM. be-PA.M./F. big-F.NOM. room-F.NOM.

「そのオフィスは大きな部屋だった。」

このような連結動詞の一致する対象に関するゆれも話者の言語能力の中に、主格述語名詞句が「主語的な」性質を持っているという意識があることを示していると考えられる。

以上、主格述語をめぐるいくつかの現象を記述的に概観したが、主格述語は単に主格形であらわれていること以外にも「主語的な」性質を示していることが明らかになった。このことは Иомдин (1990) の考え方では説明のつかないことであり、他の分析を考えなければいけないことを示していると思われる。

3. 主格主語との格における一致

前節では主格述語が様々な点で「主語的な」性質を示し、動詞によって主格を与えられると考える分析には問題が見られることを述べたが、それでは伝統的な、主格主語と主格述語の間に格に関する一致が生じていると考える分析はどうであろうか。

このことに関しては Иомдин (1990) が自説の論拠の第4点として述べている問題が最大の問題であろう。すなわち、主格述語は主格主語と格の点で一致を行っていると考えれば、その具体的にどのようなルールを立てるかが困難を極めるということである。

まず、ロシア語において格に関して一致を行うのは名詞句の内部でその主要部名詞とそれを修飾する要素の間で起こるのみである。

- (24) Я пишу старому другу.
I-NOM. write-PR.1. SG. old-M.SG.DAT. friend-M.SG.DAT.

「私は古くからの友人に手紙を書いているところだ。」

従って、この点に関してのみ主語名詞句と述語名詞句の間の格の一致を考えるのはあまりにも ad-hoc といわざるをえない。

この点に関して Stowell(1978)が可能性を示唆する提案を英語に関して行っている。すなわち、英語の連結動詞 *be* は繰り上げ動詞 (raising verb) であり、その主語はD構造においては補部となる小節に生成され、そこから文頭の位置に移動がなされているという議論である。これを仮にロシア語の文にあてはめて考えるとすると、次に示す(a)のようなD構造から(b)のような文が派生されることになる。

(25)

a) [e] ϕ [[_{NP} он] [_{NP} человек]]
be-PR. he-NOM. person-NOM.

b) [_{NP} он] ϕ [[_{NP} e] [_{NP} человек]] .

「彼は人間だ。」

このような派生のプロセスを仮定すると、小節の性質とその内部にある二つの名詞句の位置関係をどう仮定するかにもよるが、これら二つの名詞句の間に一致が起こっているとする分析も可能となるかも知れない。

しかしながら、通常の小節が見られる構文においては述語となる名詞句は主格ではあらわれないことがないし、格に関して一致するというものもない。

(26)

a) *Я считаю Никиту дурак.
I-NOM. consider-1. SG.PR. Nikita-ACC. fool-NOM.

b) Я считаю Никиту дураком.
fool-INS.

「私はニキータが馬鹿だと思う。」

さらに、*быть* 以外の連結動詞では述語は造格であらわれる。

(27) Москва является столицей СССР.
Moscow copular-3. SG.PR. capital-INS. USSR-GEN.

「モスクワはソ連の首都である。」

また、すでに示した例からも明らかのように、通常、格に関して一致が起こっている場合、一致は格に関してのみ起こるのではなく、性と数に関する一致も起こる。しかしながら、連結動詞 *быть* の主格主語と主格述語の間には性と数に関する一致は起こらない⁵。

(28) Он был свободная птица.
he-M.SG.NOM. be-PA.M.SG. free-F.SG.NOM. bird-F.SG.NOM.

「彼は自由な鳥であった。」

(29) Мальчики ϕ народ шумный.
boys-M.PL.NOM. be-PR. people-M.SG.NOM. noisy-M.SG.NOM.

「男の子というのは騒がしい連中だ。」

以上のような点からも、もし主格主語と主格述語の間に格の一致が起こっていると考えると、ロシア語の中できわめて不自然で ad-hoc 過程を想定しなければいけなくなることが明らかである。

さらに、2.2. 節と 2.3. 節で述べたこと、すなわち、述語と考えるべき名詞句を連結動詞の形動詞形が修飾できるということ、また主格述語名詞句と連結動詞 *быть* が一致を示すことがあるという事実はここで示したような一致による考え方では説明がつかない。

4. 名詞文との関係

第2節及び第3節では過去の研究にみられる主格述語の2つの解釈方法に関して、それらに不適切な点が存在することを見た。本節では第3の可能性を指摘したい。ただし、ここで示す議論はあくまでも可能な仮説の一つに過ぎない。なぜなら、下に示すようにこの仮説にも多様な問題点が存在し、決して断定することは不可能であるからである。あくまでも他の2つの説と同様に試論の域を越えていないことは当然である。

まず最初に、動詞 *быть* を用いた文の否定について概観しよう。ロシア語の *быть* には英語の *be* と同様に、ここで問題となっているような連結動詞として用いる場合と、存在を表す自動詞として用いられている場合とがある。そして、その用いられ方によって否定文の形成の方法が異なるのである。

まず、連結動詞として用いられている場合、通常の動詞の否定と同様に、否定は *не* を加えることによって表現する。その際、主格述語には形態的な変化は起こらず主格形のままである。

(30)

a) Я ϕ студент.
I -NOM. be-PR. student-NOM.

「私は学生だ。」

b) Я не ϕ студент.
not

「私は学生ではない。」

それに対して、存在文では *быть* の現在形は否定の *не* と融合を起こし *нет* となり、それに加えて存在の主体は主格形ではなく生格形をとってあらわれる。これはいわゆる「否定生格」と呼ばれる現象である。

(31)

a) Там есть самовар.
there be-PR. samovar-NOM.

「そこにはサモワールがある。」

b) Там нет самовара.
there not be-PR. samovar-GEN.

「そこにはサモワールがない。」

このように、連結動詞としての *быть* と存在の自動詞としての *быть* は意味的に異なっているだけでなく、形式的にも違いが認められる。

次に、ロシア語には伝統的に認められている「名詞文 (номинативное предложение)」というタイプの構文が存在する。これは、必須項としての主格名詞句と、それに形態的に一致した連結動詞 *быть* が動詞としてあらわれるものである。

(32) ϕ Весна.
be-PR. spring-F.SG.NOM.

「春だ。」

(33) Была весна.
be-PA.F.SG. spring-F.SG.NOM.

「春であった。」

このタイプの構文において、主格名詞句は形態論的に動詞と一致を示すので主語と考えられ、それ故一見すると主動詞 *быть* は存在を表す自動詞であり、このタイプの文は存在文と同一のものであるかに見える。しかしながら、意味的な観点から考えると、ここでの主格名詞句は述語的なものであり、存在文の主語とは異なるものであると考えられる。また、形式的な観点から見ても、これらの名詞文では否定文が以下の例のようになり、存在文とは異なることに注目しなければならない。

(34)

a) В Москве ϕ весна.
in Moscow-LOC. be-PR. spring-F.SG.NOM.

「モスクワは春だ。」

b) В Москве не ϕ весна.
not spring-F.SG.NOM.

「モスクワは春ではない。」

c) *В Москве нет весны.
not be-PR. spring-GEN.

このような形式的な観点からも名詞文は存在文とは異なり、そこに見られる主格名詞句は述語的なものであることが見て取れる⁶。

ここで主格述語に関して提示する第3の仮説は、このような[主格主語名詞句+*быть*+主格述語名詞句]という構文において、後半の主格述語が名詞文の主格主語と同じものなのではないかということである。このことは上述のような両者の間の形式的・意味的な類似性から、あるいは第2節で示したようなこの主格述語名詞句に観察される主語的な性質から多分に可能な解釈であると思われるが、問題となるのは前半の主格主語の扱いである。

ロシア語にはこの他にも主格が主語でない位置にあらわれる場合はあるのであろうか。ロシア語において主語以外の要素に主格名詞句があらわれるものとしていわゆる左方転移化要素 (left dislocated phrase) がある。

(35) Мария₁ — я ee₁ люблю.
Marija-NOM. I-NOM. her-ACC. love-1. SG.PR.

「マリヤは私が愛している。」

ここで、*Мария* は主格形を有しているが、主語はあくまでも *я* である。また、*Мария* は移動によって生成されたものではなく基底部ですでにこの位置にあったものであると考えられる (匹田 1993 参照)。

このような名詞句は主語の位置を占めるが故に主格を付与されるわけではなく、格付与という点で上のように仮定した場合の連結動詞の主格主語と似ている。

また、主格述語を持つ連結動詞構文は造格述語を持つものよりも主語がトピックとして文の先頭におかれることに対する制約が強い。

(36) (「誰が英雄だったのか?」という質問に対して)

a) Героem был Валерий.
hero-INS. be-M.SG.PA. Valerij-NOM.

b) *Герой был Валерий.
hero-NOM.

「ワレーリーが英雄だった。」

その一方で、左方転移化要素も必ず [TOPIC-COMMENT] の語順に従って、文頭におかれなければならない。

- (37) *Завтра хорошая студентка_i — я ее_i буду видеть.
tomorrow good-F.NOM. student-F.NOM. I-NOM. her-ACC. will-1. SG. see

「明日その優秀な女学生には私が会うだろう。」

(匹田 1993)

このような主格主語、左方転移化要素の両者とも機能的な強い制約を守らなければいけないという事実は主格主語が左方転移化要素と同じものであることを示唆するものとも考えることも可能かも知れない⁷。

この考え方を採用すると、上で述べたような他の2つの説に対する問題点は解消できることになる。しかしながら、問題は残る。

まず第1点は、主格述語があらわれる場合の *быть* の主格主語を左方転移化要素と同一のものと考えた場合の問題である。左方転移化要素が文頭にしかあらわれられないのは厳密な形式的な制約によるものであるのに対して、主格主語が文頭にあらわれなければいけないのは強いながらも傾向に過ぎないと考えられる。このちがいはなぜなのか。

第2点として次のような文が可能である。

- (38) Никита Вожи́ков_i — он ϕ очень хороший лингвист_i.
Nikita Vozhikov-NOM. he-NOM. be-PR. very good-NOM. linguist-NOM.

「ニキータ・ヴォジコフは非常に優れた言語学者である。」

ここでは左方転移化要素 *Никита Вожи́ков* と *быть* の主格主語 *он* が両方あらわれている。しかしながら、ロシア語において通常左方転移化要素が2つあらわれることはできない。

- (39) *Валера_i Э́мма_j — он_i ее_j любит.
Valera-NOM. Emma-NOM. he-NOM. her-ACC. love-3. SG.PR.

「*ワレーラ、エンマ、彼は彼女を愛している。」

もし、仮に主格主語と左方転移化要素が同一のものであると考えると、この現象が説明がつかないことになる。

第3の問題点は、左方転移化要素は必ず後ろにそれと同一指示となる代名詞を持つが、*быть* の主格主語は当然のことながら、そのようなものを持たない。この違いはなぜ生じるのか。

第4点は、非常に本質的な問題である。第2節で主格述語が主語的な性質を示すことを論じたが、主格主語も当然ながら多くの主語的な性格を有している。これが主語ではないと議論することは不可能である。つまり、主格の主語と述語を有する連結動詞構文では主格の主語と述語がそれなりに主語的であるわけである。例えば、動詞の一致は基本的には主格主語との間に行われるし、形動詞が修飾する対象として主語も可能である。このどちらも「主語的な性質を示すのはなぜか」という疑問に答えることは現時点では全く不可能であることは言うまでもない。

5. おわりに

本稿ではロシア語の連結動詞 *быть* の主格述語名詞句の性質を概観し、それが何であるかについての過去の研究から2つの説を紹介し、その問題点を指摘した。それら問題点を回避するために新たな第3の仮説を提案したが、上で述べたようにこの説にも別の問題点が生じてしまう。

もちろん、本稿は結論を提示することを目的としていないので、ここでは記述的事実と問題点の指摘にとどめておき、今後の研究の足がかりとしたい。

注

1. 本稿のグロスで用いた略記は以下の通りである。

NOM. =nominative; именительный падеж; 主格

GEN. genitive; родительный падеж; 生格

DAT. =dative; дательный падеж; 与格

ACC. =accusative; винительный падеж; 対格

INS. =instrumental; творительный падеж; 造格

LOC. =locative; предложный падеж; 前置格

1. = 1 st person; первое лицо; 1人称

2. = 2 nd person; второе лицо; 2人称

3. = 3 rd person; третье лицо; 3人称

PR. =present; настоящее время; 現在時制

PA. =past; прошедшее время; 過去時制

FU. =future; будущее время; 未来時制

IMP. =imperative; повелительное наклонение; 命令法

SG. =singular; единственное число; 単数

PL. =plural; множественное число; 複数

M. =masculine; мужской род; 男性

F. =female; женский род; 女性

N. =neuter; средний род; 中性

ADVPART. =adverbial participle; деепричастие; 副動詞

ADJPART. =adjectival participle; причастие; 形動詞

また、本稿ではグロス中の名詞に付けてある性別とそれ以外の動詞や形容詞に付けてある性別とを一切区別せずに付けてあるが、これは便宜上のものである。実際には名詞の性別はその名詞の持つ固有の性別であるのに対して、動詞や形容詞の性別とは何らかの名詞句に一致した結果の形であり、そのものが持つ固有の性別ではない。

2. ロシア語では通常、連結動詞 *быть* の現在形は具体的な音形を持たない。(現在形として *есть* という形が用いられることもあるが、それは文語的な表現であるとされる。ちなみに今回インフォーマントをお願いした方からはこのような連結動詞の *есть* を用いた文は「非常に奇妙である」との判断を頂戴した。) 従って、ロシア語のように比較的「自由な」語順を有する言語において *быть* の現在形の存在を示すための ϕ はその位置が必然的に恣意的なものとならざるをえない。本稿では仮に明示的な現在形をおくとしたら「最も自然だ」と考えられる位置に ϕ をおいた。また、*быть* は英語の *be* と同様に存在を表すことがあるが、この場合は、特にそこに論理強勢が置かれている場合は、全く自然に用いられる。
3. Иомднн (1990) はこの点を自分の分析に則って解決する手段を示していない。彼が自分の説が伝統的な一致説より勝っていると考える根拠は一致説がその論拠とするのがこの一点のみであるのに対して彼の説には4つの根拠があるということである。しかし、これら4つの根拠が全て強いものとはなり得ない上に、次節で示すようにそれを否定する根拠が他にも存在する。このことは彼の議論の大きな弱点の一つである。
4. このような揺れに関して、Barnetová (1979) は、通常定性 (детерминированность) が影響を与えると論じている。すなわち、このような場合、動詞は原則として定名詞に一致をし、定性に関して主語名詞句と述語名詞句に違いが認められなければその場合はより有標 (маркированный) なものが優先されると主張する。例えば、複数単数は単数より有標であり、女性は男性より有標であると考えられる。

5. ここで「一致が起こらない」というのは文法的なプロセスとしての一致が行われていないということである。当然、ロシア語におけるこの類の文の大半は主語名詞と述語名詞が同一の性・数を有している。

a) Он ϕ мой брат.
he-M.SG.NOM. be-PR. my-M.SG.NOM. brother-M.SG.NOM.

「彼は私の兄だ。」

b) Мои братья ϕ врачи.
my-PL.NOM. brother-PL.NOM. be-PR. doctor-PL.NOM.

「私の兄弟達は医師だ。」

しかしながら、これらは意味的な制約から同じ性・数を示しているだけであって、文法的な一致というプロセスがここで行われているとは考えられない。

ちなみに、2人称代名詞の *вы* は複数の意味と単数の意味の両方を有するが(単数の時は親しくない相手に対して用いられる)、単数として用いられている場合でも、一致に関しては基本的に複数の特徴を示す。

c) Кому вы пишете?
who-DAT. write-PR.2. PL.

「あなたは誰に手紙を書いているのですか？」

d) Вы ϕ правы.
be-PR. right-PL.

「あなたは正しい。」

ところが、名詞(そしてそれに準ずると考えられる形容詞の長語尾形)だけはこの場合単数形を示す。

e) Вы ϕ хорошая женщина.
be-PR. good-F.SG.NOM. woman-F.SG.NOM.

「あなたはいい女だ。」

このことから述語名詞句は主語名詞句に関して性・数において一致を文法的に行っていないことがわかる。

6. 形式的には存在文と同じ形成方法の否定文 *В Москве нет весны* も可能である。

ただし、この場合は意味が異なり「モスクワには春がない(例えば、一年を通してとても寒いので)」という意味になる。

ただし、同様にしばしば名詞文の典型的な例としてあげられることの多い(例えば АН СССР 1980)

a) ϕ Тишина.
be-PR. silence-F.SG.NOM.

「静かだ。」

のような文の否定文は

b) Нет тишины.
not be-PR. silence-F.SG.GEN.

「静かではない。」

ようになり、存在文と同じ形式を示す。名詞文の性質自体を考察しなおす必要があるのであろう。

7. これら2種類の名詞句は、INFLによって統率されているものが主格を付与されるとする生成文法理論における格付与の理論では説明できないことになるが、Babby (1986) はロシア語に関して以下のような主格付与の方法を提案している。

(9) Nominative Case Assignment

A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

この方法をとればいずれも主格の付与が正しく行われることになる。

参考文献

- АН СССР (1970) *Грамматика современного русского языка*, Наука, Москва.
———, (1980) *Русская грамматика*, в 2 тт., Наука, Москва.

- Иомдин, Л.Л. (1990) *Автоматическая обработка текста на естественном языке: модель согласования*, Наука, Москва.
- Кохтев, Н.Н. и Д.Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка, Русский язык*, Москва.
- Babby, L.H. (1986) “The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian”, in Brecht and Levine (1986).
- Barnetová, V., H. Běličová-Křížková, O. Leška, Z. Skoumalová and V. Straková (1979) *Русская грамматика*, Academia, Praha.
- Brecht, R.D. and J.S. Levine eds. (1986) *Case in Slavic*, Slavica.
- Chvany, C.V. (1976) *On the Syntax of BE-Sentences in Russian*, Slavica.
- Rappaport, G.C. (1986) “On the Grammar of Simile: Case and Configuration”, in Brecht and Levine (1986).
- Stowell, T. (1978) “What was There before There was There”, in D.Farkas et al eds. *Papers from the Fourteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society, CLS 14*.
- 匹田 剛 (1993) 「ロシア語における2つの統語的トピックについて」, 『人文研究』, 第86輯, 小樽商科大学。